

寫濟

慶長十四年島津氏琉球國ヲ征討シ其  
 服従スルヤ版圖中ノ諸島マテモ人ヲ  
 遣シ戸教人員ヲ改メ土地ヲ檢シ田畠  
 ノ租税ヲ定メ以米鎮撫ノ士官ヲ輪番  
 在留セシムトイヘ此政度刑制ニ至ッテハ  
 皆彼レノ措置ニ任セ曾テ變改セシメテ  
 夕今日ニ至リ依然舊法ヲ固守シ自カラ  
 一小天地ヲカシ諸官堂々尊大ノ風ヲナ  
 シ且獨取暴斂ノ意ナキコトヲタハス殊ニ  
 世ノ沿革形勢ニ至ッテハ更ニ其何  
 事タルヲ識別セス屢庶見島縣廳へ時  
 世不當ノ事共同出雜新ノ日ニ當リ不  
 都合ノ至リナリト縣官ノ評議ヲ以テ  
 奈良原幸五郎及ヒ貞馨ニ渡瑞ノ命ヲ下  
 シ百般ノ事因革釐正ノ時世ニ的當セ  
 ル政ヲ施シム且曰海路杳渺一々指揮

外務省

シカタシニ人ニ因革ノ事ヲ委任ス都  
テ二人ノ見留ヲ以テ宜シク處置スヘ  
シト二人縣令ヲ受ケ明治五年正月五  
日鹿見島ヲ渡シ同十五日琉球那覇江  
へ着ス琉官孤疑如何ナル令ヲ渡スルヤト  
忌怖ノ色アリ細カニ政体風俗人氣ヲ注  
視スルニ官階秩然禮制肅然上下敦樸  
ノ風ニメ觀ルニ一キモノ甚タ多シトイ

外務省

へ此僻陋頑固ノ風人々心肝ニ凝結シ  
一時ニ歎然タラシムル一能ハサルヲ察  
シ二人内議ノ上三部ニノ變革ヲ行ハ  
ント目途ヲ定メ日ヲ刻シ撰政三司官  
ヲ招キ初メ因革ノ為メ二人ヲ差メト  
書タル縣參事ヨリノ一翰ヲ渡シ次ニ二  
人存慮ノ程ヲ細書メ之ヲ共ヘ本朝ノ  
沿革宇内ノ形勢事情ヲ示諭シ此ノ

趣ヲ国王ニ達シ要路ノ官員評議ノ上  
答酬ヲキカント述フ琉官承諾メ退ク其  
后国王ヘモ面接前条ノ趣ヲ傳フ二十  
余日ヲ経テ令セル所説クトコロ至皆ニ  
ノ異議ナシトノ答書アリ因ツテ先ツ  
従前庶見島ヨリ來傳セシ事件ヲ解  
テ其心ヲ悦ハシメ繼テ不急ノ祀官ヲ汰  
シ百般ノ事務煩擾ヲ去リ易簡ニ就キ年

外務省

中ノ禮式且ハ國諸官ノ僕從ニ部ニ  
テ減シ縣官在勤ノ接待贈答十ノ八九ヲ  
減シ學校ヲ盛ニメ教化ノ道ヲ擴メ制度  
ヲ寬ニメ士庶ヲ愛撫シ各自由ノ權ヲ  
全フセシメ永ク朝旨ヲ奉戴シ违犯スヘ  
カラサル等ノ一ヲケ奉書ニメ之ヲ授ク  
ル後懇々説得且威シ且諭シ三月余ヲ  
経テ謹シテ説諭ノ如クセント因革措

置ヲ取調ヘ書面ヲ以テ相示セリ二人ノ廉  
鬼島ヲ獲スル琉球ヨリ島津氏ヘノ負債  
金五万圓余アリ年賦ニテ消却スルノ定  
メナリ之ヲ共ヘ切ニスルトノ一札ヲ受  
取居タリ故ニ琉官ヲ招キ此ノ一札ヲ授  
ケヨツテ曰及ス官用ニ費ヘカラス四  
万圓ヲ本ニ立テ年々消却スヘキ金  
ヲ差分ケ窮乏民ヲ救育スヘシト論

外務省

ス琉官拜シ恩ヲ謝ス彼ニ農民ノ帶租  
壹万石余アリ年々數ヲ照シテ補ハシ  
ム琉官ノ議ヲ以テ皆之ヲ免シ攝政ニ  
司官門閥ノ祿高ヲ減シ前ト合ノ窮乏  
民鰥寡孤獨ヲ救育スル方法ヲ定メニ  
人ニ示セリ盡ク其議ノ如ニメ之ヲ確  
定ム八重山島石炭<sup>取調</sup>等ノ事ニ付縣廳書  
記伊地知小十郎渡航ノ命ヲ受ケ共ニ廉

見島ヲ度ス縣官小十郎ニ二人ノ指揮ヲ待  
ヘント令スヨツテ之ニ托シ八重山ノ事ヲ  
糾シ其弊害ヲ改メシム在琉中清國福州  
行ノ琉船帰着セリ此船ヨリ台湾へ漂流  
セシ八重山人十名ヲ乗セ帰レリ台湾  
ノ土蠻八重山人數十名ヲ殺害セリトノ  
説ヲ聞キ萬國交和ノ今日ニ臨ミカ  
事アツテハ如所ノ至リナリト漂流人ノ内  
西名ヲ拓キ其顛末ヲ糾シ之ヲ記載ス六  
月廿一日鹿兒島縣ヨリ命セル琉球在  
勤ノ官負着セリ此ノ便リニ縣參事ヨリ  
維新以來國王ヨリ慶賀ノ禮ヲ修メシ  
一ナシコレノ為ニ權典奉右松五由權大  
層今藤宏ヲ遣スヘケレト速カニ承諾ノ  
程心許ナレハ二人ヨリ内論ノ異議ヲ  
生セス登京セシムヘント告来レリ依テ

外務省

大旨ヲ一紙ニ認メ攝政三司官ヲ招キ親  
政ヲ視シ奉ル者ニ重臣ヲ使トシ上京セシム  
ヘキ命ヲ傳ヘ且迎船トノ縣官某ノ不日  
ニ並氣船ヨリ来ルヘシコノ由ヲ國<sup>王</sup>ニ傳  
ヘ王子三司官ヲ正副トシ此節来港ノ  
船ヨリ出京アルヘシ期近キニアリ速ニ  
其決答ヲ聞ント達ス兩日ヲ過キテ  
國王ヨリ伊法王子宜野灣親<sup>方</sup>及ヒ喜屋  
武親雲上ヘ上京慶賀ノ使節ヲ勅ムヘ  
シト内命ヲ下セリト答報ス奉命ノ事粗  
緒ニツクラ以テ瑤官ニ帰期ヲ告ケ今般  
變革ノケ余ハ將來ノ規則トシ永ク背  
抱セストノ攝政三司官ノ請書ヲ取り同  
七月十一日那霸江ヲ發シ十四日鹿兒  
島ヘ着ス渡球以來處置セシ始末且  
八重山人殺害ニ達シ事共ヲ縣參事

外務省

等ニ陳述スハ重山人殺害ニ逢ヘル届之ヲ  
處置スル縣官ノ見届ヲ奏スル為ニ貞馨ニ  
出京ヲ命セリ同廿七日琉球使臣縣官員ト  
船ヲ同シ鹿兒島ニ着ス廿八日貞馨鹿兒  
島ヲ出登シ八月十二日東京ニ着ス同十四  
日今般琉使臣上京ニ有同國ノ事實  
ヲ知レ者ヲ出頭セシムヘシト外務省ヨリ  
鹿兒島出張縣廳ヘ達シ至ヘリ縣官ヨ

外務省

リ貞馨ニ出頭スヘシト命ス同日出省  
宮本大丞ヘ面會其尋ニ應レ知レ  
之ヲ答フ同夜外務卿宅ニ至リハ重山  
人殺害ニ逢ヒシ始末鹿兒島縣官右處  
置ノ見届ノ次第及琉球ノ政体風俗事  
情ヲ演説ス同廿二日貞馨外務省七  
等出仕命ヲ奉ス同日系船ノ琉使臣  
接待掛ノ省命ヲ受ク兼テ參朝ノ使

臣ハ外務省ヨリ接遇スヘシト正院ノ  
命アルニヨリ愛宕下毛利從五位ノ  
邸宅ヲ假リ旅館ヲ設ケ使臣ノ着ス  
ルヲ待ツ宮本大丞渡邊必記等其掛  
夕リ使臣麻見島縣權參事椎原共右  
衛門権典事右松五<sup>助権</sup>大<sup>助</sup>屬今藤宏史生  
上村慶四郎ト共ニ同縣管下ノ蒸氣  
船三邨凡ニ乗シ九月二日夕第六時品

外務省

川へ着ス兼テ同所へ出張セシ等外官  
員ノ報知ニヨリ堀江小録品川ニ到リ  
之ヲ迎ヘ二日午前第十一時比正使伊  
江王子副使宜野灣親方贊議官喜屋  
武親雲上隨信ノ者三十四名設ケ置  
タル旅館へ到着セリ